

比嘉トーマス太郎と第二次世界大戦

—人種・戦争協力・沖縄をめぐる思想および態度の考察—

井上 史 (ボストンカレッジ大学院後期博士課程修了 PhD)

I. はじめに

人物紹介

比嘉トーマス太郎/Thomas Taro Higa (1916～1985年)

アメリカ合衆国ハワイ準州オアフ島ホノルル市生まれ。幼少／青年期の大半を沖縄・日本で過ごす。1941年、ハワイ州軍に入隊。1943年、日系兵のみで編制された第百歩兵大隊の一員としてイタリア戦線に赴く。戦場で二度負傷し、米国政府から名誉負傷賞を受賞。帰国後、米国日系移民コミュニティの二世に入隊を呼びかける講演活動を精力的に行う。1945年、沖縄戦では米陸軍通訳兵を務め、沖縄の言葉で投降を呼びかけ多くの命を救う。終戦直後、沖縄救済運動・日系移民帰化権獲得運動の立役者となる。1960年代以降、ドキュメンタリー『移民は生きる』(1969)、編著『移民は生きる』(1974)、自叙伝『ある二世の轍 奇形児と称された帰米二世が太平洋戦を中心に辿った数奇のたどり』(1983)を世に送り出す。1983年、沖縄タイムス賞受賞。

先行研究における位置づけ・研究目的

近年の二世兵に関する研究は人種化された社会構造や戦時という特殊な文脈において日系兵がどのような地位を占めたかを検証し、従来の「二世ヒロイズム」史観に挑戦している。20世紀前半に多く生み出された、比嘉のような生い立ちをもつ「帰米」移民二世に関する研究も、ナショナルヒストリーの枠組みを解体し、そのなかで比嘉も分析の射程に包含されてきた。しかし、比嘉を分析の対象とする学術研究はまだ層が浅く、彼の思想や主体性に焦点をあてた本格的な実証研究はまだ生み出されていない¹。20世紀中葉にアジア太平洋で覇権を争奪し合った日米両帝国の「辺境」を故郷にもつ比嘉を研究対象にすることは、沖縄・ハワイ・日本・米国間の重層的ヒエラルキー関係

¹ 日本語主要参考文献は次の通り。下嶋哲郎『豚と沖縄独立』(未来社、1997年)(ノンフィクション作家である下嶋哲郎氏が、比嘉の人物像や沖縄救済運動を詳しく紹介。)、森本豊富「比嘉トーマス太郎の『巡講』戦時下米大陸における講演旅行」(細川周平編著『日系文化を編み直す—歴史・文芸・接触』ミネルヴァ書房、2017年)、125—144頁。英語圏の先行研究は次の通り。Michael Jin, “Beyond Two Homelands: Migration and Transnationalism of Japanese Americans in the Pacific, 1930-1955,” Ph.D. dissertation (University of California Santa Cruz, 2013); Yuichiro Onishi, “Occupied Okinawa on the Edge: On Being Okinawan in Hawaii and U.S. Colonialism toward Okinawa,” *American Quarterly* Vol. 64, No. 4, 2012, pp. 741-765; Noriko Shimada, “The Emergence of Okinawan Ethnic Identity in Hawai‘i: Wartime and Postwar Experiences,” *The Japanese Journal of American Studies* No. 23, 2012, pp. 117-138.

の史的展開の理解を深めるうえでも重要な意味をもつ。本発表を通じて比嘉の戦争協力に対する思想・態度が変容したプロセスを時局の変化に伴って明らかにし、比嘉の人生における第二次世界大戦の位置づけを確認することとする。

史料／方法論

実証に用いる史料：カリフォルニア大学所蔵の比嘉文書²、比嘉の著作³、およびオーラル史料⁴（報告者の比嘉の長男 Alvin Higa 氏へのインタビュー、荒良寛による比嘉太郎へのインタビュー）。

方法論：帝国間の覇権争いや米軍基地の史的展開といったマクロ的な視点と、社会史ないし思想史が提示するミクロ的な視点とを融合するうえで有効である人種をめぐる言説分析を主とする。特に戦時下（総力戦体制下）の日系アメリカ人をめぐる排他的／包摂的人種差別の政治力学については、タカシ・フジタニの研究を参照⁵。

研究上の問い

太平洋戦争前期には戦時体制下の排他的人種差別の実態に反感を抱いていた比嘉が、のちに「モデル帰米」として戦時アメリカのナショナリズムの高揚に協力するようになったのはなぜか。比嘉に内在した越境的アイデンティティは、沖縄戦においていかなる形で表出し、人種をめぐる政治力学はその背後でどのような展開をみせたか。

II. 比嘉の生い立ち

幼少青年時代（1916年～1940年）

幼少時代、沖縄県中頭郡北中城村の叔母のもとで育てられる。のちに人生の師として仰ぐ担任の先生と出会うが、当時の困窮した沖縄での生活を「底の生活」と述懐。9歳のときに小学校を中退し、従兄とともに大阪に出稼ぎに出る。ハワイで両親の農場の手伝いをした期間もあったが（時期は不明）、青年期の大半は紡績工場など職を転々として過ごした。出稼ぎ時代に電気学に傾倒する

² Tarō Higa Papers, Japanese American Research Project Collection (Collection 2010), UCLA Library Special Collections, Charles E. Young Research Library.

³ 比嘉太郎編著『移民は生きる』（日米時報社、1974年）、比嘉太郎編著『ある二世の轍 奇形児と称された帰米二世が太平洋戦を中心に辿った数奇のたどり』（日貿出版社、1982年）。

⁴ 報告者は Alvin Higa 氏へのインタビューを2021年8月19日（日本時間午前8時～11時）に Zoom にて行った。その他、荒良寛による比嘉太郎へのオーラル・ヒストリー・インタビュー（1977年10月4日）も活用した。同インタビューについては、Japanese Cultural Center of Hawaii のウェブサイトにて英語版と日本語版のテキストが公開されている。（<https://jcch.soutrnglobal.net/Portal/Default/en-GB/RecordView/Index/6213>）。

⁵ Takashi Fujitani, *Race for Empire: Koreans As Japanese and Japanese As Americans During World War II*, Berkeley and Los Angeles; London: University of California Press, 2013.

ようになり、1940年、東京の電機専門学校を卒業。沖縄で過ごした年数は少なかったが、出稼ぎ時代にヤマトの人びとに受けたいじめ、太平洋戦争開戦前夜に日本の特高警察に暴行された経験等を通して、沖縄人としてのアイデンティティを強くする。

III. 第二次世界大戦初期—太平洋戦争開戦からイタリア戦線まで—

太平洋戦争開戦前後（1941年）

1940年9月、米国で徴兵法、施行。1941年6月、比嘉、ハワイ州軍スコフィールド兵営に入隊。12週間の基礎訓練後、第二九八連隊に所属。1941年12月7日（現地時間）、日本軍による真珠湾攻撃／戒厳令の発令。沖縄系／日系移民、以前にもまして排他的人種差別の対象へ。1942年6月、1,432名の「日系」兵、第百歩兵大隊（ハワイ州兵第二九八連隊・第二九九連隊ほかハワイ陸軍予備軍等を統合・再編）に再配属。ハワイ社会・軍隊内で排他的／包摂的人種差別が混在するなか、比嘉は排他／排斥に強い反感と恐怖心を示す。

「船が港を出、ホノルルが見えなくなっても、日系兵士たちは看板を去ろうとはしない。お互いに口もきかないままであった。夕闇がせまる頃になってようやく我にかえり、あちこちで話し声が始まった。開口一番をついて出たのは「俺たちはいったいどうなるのだろうか」というわが身を心配する言葉であった。が同時に島に残った日本人、特に英語が全く理解できない一世の人たちにも思いをよせていた。日本語禁止の環境でどのように生活していけるのだろうか。バスの中でまたは歩道上で、友人と出会い、日本語を話しているのを目撃でもされようものなら、日頃は三等か四等市民のような輩からもいじめられるだろう。彼らは「スピーク イングリッシュ（英語を話せ）」とどなりつけていい気になっているにちがいない。どなられても口応えすることもできず、「エース エース」とやっと詫びることができたらよいほうである⁶」。

1942年、第百歩兵大隊編制時の証言

「むしろ二世たちは、ヨーロッパ戦線におもむき、ドイツ軍を敵としてたたかうほうに精神的負担の軽さを感じていたのであった⁷」。

⁶ 比嘉太郎前掲『ある二世の轍』、57頁。

⁷ 同上、65頁。

「日系兵だからといって前線で差別するならしろ。それならドイツ軍に入り、ヨーロッパ・シベリアを通過して日本軍に入り、日本の軍部と結び、ラジオその他で大いに反米宣伝をやらかしてやろうではないか。どうせ一遍こっきりの生涯だ。生死は時の運だ。二人でやろう⁸」。

第百歩兵大隊編制からイタリア戦線へ(1942～1943年)

1943年9月、第百歩兵大隊、イタリア戦線派兵。戦地で日系二世兵仲間の壮絶な死と遭遇。国家アメリカへの奉仕がハワイの沖縄系／日系移民の社会的地位向上につながるという意識が強くなる。1944年春、比嘉、イタリア・アフリカでの治療後、アメリカ本国の陸軍病院へ移送される。

「どこにいても親元祖様(御先祖様)の御守護の下にいることを忘れないでください」と同時に、「軍人になった以上は国のために尽くしてください。(中略)私がハワイに帰ったときに小遣銭(事業を始める際の資本という意味)に困らないようにと、家族の者を動かして、広大な土地を耕作してくれているのである。『…お母さんは何時も太郎と一緒にいる…』、私は涙しながらこの手紙を繰り返し読んだ⁹」。

IV. 第二次世界大戦後期—「巡講」をめぐる—

巡講の背景

1943年1月の日系兵積極的徴用に伴い、戦時転住局(WRA)の強制収容所内での志願兵を募集が始まる。日米開戦後、日系市民同盟(JACL)は日本と結びつきが強い帰米を他者化し日系コミュニティから分離することで、残りの日系移民の忠誠心を米政府に認めさせるよう画策。しかし比嘉が米国に戻った1944年には、二世移民のなかから志願兵を輩出することに苦心するように。1944年6月、比嘉、米軍から静養旅行の許可を得る。JACL、比嘉を入隊勧誘者として起用。1944年8月15日～12月10日、日系兵の入隊を呼びかけるための「巡講」を全米規模で行う(合計21州、95ヶ所で講演)。比嘉は自身の著作内であまり講演内容に言及していないが、当時の新聞が頻繁に引用した比嘉証言がある。米国メディアの日系兵表象にも変化。

⁸ 同上、93頁。

⁹ 同上、112～114頁。

「驚いたことは、日系兵は、真珠湾を攻撃した日本人と同様であるから、弾丸徐け(ママ)にはまず日系兵を、その次に黒人兵をやり、最後から白人兵は進撃する。それがため日系兵の犠牲が多いのだ。連合軍がイタリアに誠(ママ)しやかにいいふらされていたことである。それがため息子を、愛しの人を招集された人たちの心情は哀れそのものであった。特にそれらのデマのために人心の動揺は匿(ママ)しがたく、ごく少数ではあるが反動分子の発生、またそれを利用する半日分子の暗躍、このまま放任すれば在米日系人の将来に由々しき問題の起こるであろうことは識者の認めるところで、大いに憂慮された¹⁰⁾」。

二世兵の息子を亡くした家族の悲壮に触れ、「自分は或る強い責任感を覚えた(中略)此の母親も自分の母だ。(中略)若し私に何か相談にでもなる様な事柄でもありましたならばあなた様の息子にでも相談なさるお積りで如何様な事柄でも構ひません手紙でもよいご相談下されば私の及ぶ限り力添へさせて戴きたい希望、其れが先だてる戦友に対しての責任であり亦せめてもの慰めだと考へます。私の宛名は(住所)¹¹⁾と綴っている。

「米大陸巡講の旅より 第百歩兵大隊 比嘉太郎一等兵」

Hawaii Herald, February 14, 1945

“Because of their eagerness to erase from the minds of all people, any doubt of their loyalty to the United States the battlefield casualties were unusually high. ‘Our boys on the battle front went way above and beyond the call of duty,’ Higa related.”¹²⁾ (日系兵のあいだで負傷者が異常に多いのは、課せられた任務以上の行いを戦場でするからと証言。)

Sparta Tribune, October 27, 1944

V. 沖縄戦

比嘉の戦地における人道主義的活動／沖縄救済運動(1945年)

¹⁰⁾ 同上、128～129頁。

¹¹⁾ 「米大陸巡講の旅より 第百歩兵大隊 比嘉太郎一等兵」*Hawaii Herald*, February 14, 1945, Tarō Higa Papers, Japanese American Research Project Collection (Collection 2010), UCLA Library Special Collections, Charles E. Young Research Library.

¹²⁾ *Sparta Tribune*, October 27, 1944, Tarō Higa Papers, Japanese American Research Project Collection (Collection 2010), UCLA Library Special Collections, Charles E. Young Research Library.

1945年4月～6月、米陸軍の通訳兵として沖縄戦に参加。ヨーロッパで勇敢にたたかった「米軍」に属する「日系兵」という承認・賞賛を得た地位と、「沖縄人」というアイデンティティを使い分け、戦時アメリカのナショナリズムが承認するに至った多人種国家の一員として、戦禍沖縄の人びとを救う。この頃、沖縄戦を指揮した上級米軍人の人種意識にも変化。1945年9月16日、米陸軍を除隊¹³。

沖縄の人びとが「可哀相」に思え、「日系兵を代表した自分が行かなかったら日系兵、皆が（沖縄への派兵に）Noと言ったように」になってしまう状況を危惧して、参加を決意した¹⁴。

「私はいった。『決して発砲しないでくれ、沖縄人は決して私を殺しはしないから、たとえ彼らがさわいでも決して発砲しないでくれ、銃口をこちらに向けないでくれ』と頼むと、米兵たちは私の申し出に応じてくれた。（私がヨーロッパ戦線で勇名をはせた二世部隊の一員としてドイツ軍と戦ってきたと聞いただけで、沖縄で戦っている米兵たちからは大分優遇されていた。沖縄戦線にヨーロッパの戦線から来たものとしては私は一人だったらしい）。事実私は沖縄人を信頼していた。私は沖縄の方言で洞穴の入口から叫んだ。（中略）「私もウチナンツー（沖縄人）です。私は中城村字袋の者で喜舎場学校を出た者で比嘉という者です。何卒私を信じて下さい」¹⁵。

ジョセフ・スティルウェル／General Joseph W. Stilwell（サイモン・B・バックナー中将死後、第10軍司令官に就任）の証言

“You’re damned right, those Nisei boys have got a place in the American heart—now and forever... I say we soldiers ought to form a pick-axe club. Any time we see any bar-fly commando picking on any of these kids or in any way discriminating against them, we ought to bang them over the head with a pick-axe, and I’m willing to be the character member of such a club.”¹⁶（要約：二世ボーイズはアメリカ人の心のなかに（特別な）地位を築いた。私たち兵士は彼らが差別を受けているのをみかけたら、助けにいかなければならない。私はそのようなクラブの会員になる。）

¹³前掲報告者の Alvin Higa 氏へのインタビュー。

¹⁴ 比嘉太郎前掲『ある二世の轍』、311-316頁、前掲荒了寛による比嘉太郎へのオーラル・ヒストリー・インタビュー。

¹⁵ 比嘉太郎前掲『移民は生きる』、177～178頁。

¹⁶ James C. McNaughton, *Nisei Linguists: Japanese Americans in the Military Intelligence Service during World War II*, Washington D.C.: Department of the Army, 2006, 369.

VI. 結論

以上のように、比嘉の戦争協力に対する態度の変化と米国政府の日系兵徴用をめぐる政策転換(1942年～1943年)の流れは密接に連動していた。そしてその背景には、米軍・戦時転住局(WRA)・日系アメリカ市民同盟(JACL)・比嘉の相互依存関係があった。しかし、先行研究が提示する「モデル帰米」としての比嘉像¹⁷は、彼がヨーロッパ戦線に赴くまでに抱えていた人種差別への憤りや米国の戦争協力に対する葛藤を十分に視野に入れていなかった。比嘉は、米国政府の日系移民包摂の動きに対しては戦争協力で応じるようになり、「巡講」を経て、戦地沖縄へ赴くこととなった。沖縄住民の包摂を見据え心理戦を重視した米国の対沖縄戦戦略(アイスバーグ作戦)と、比嘉の沖縄に対する郷愁や人道主義は合致し、比嘉は米軍の協力を得て、「沖縄救済運動」の基盤を築くことに成功した。

戦中から戦後初期にかけての比嘉は、米軍に利用されたという見方もできるし、比嘉が米軍を利用したという見方も可能であろう。いずれにしても、戦後、比嘉は沖縄統治に動員された二世たちとは異なる生き方を選んだ。比嘉研究は、沖縄・ハワイ・日本・アメリカの関係史の一断面を浮かびあがらせると同時に、歴史学にとっての根本課題である構造と主体性の関係を考えるうえでも、貴重な手がかりとなるはずである。

今後の研究課題

ハワイと沖縄の類似性と比較は、両地域の基地史の展開を視野に入れることで、より具体的に把握することが可能になるであろう。基地社会としてのハワイと沖縄における比嘉の記憶の継承は、当然、「リメンバー・パールハーバー」と沖縄戦、「二世ヒロイズム」と新基地建設の是非をめぐる議論、そして現代の戦争と深く結びつき、歴史認識の磁場として存在していることを認識する必要がある。本研究の成果にもとづき、今後も比嘉の生い立ちや沖縄救済運動・日系移民帰化権運動の研究を引き続き行っていく予定である。

¹⁷ 前掲 Jin, “Beyond Two Homelands: Migration and Transnationalism of Japanese Americans in the Pacific, 1930-1955,” Ph.D. dissertation (University of California Santa Cruz, 2013)を参照されたい。